

令和6年度(2024年度)秋季特別展

紙芝居の歴史と阪本一房

令和6年(2024年)10月12日(土)

～11月24日(日)



第1回箕面紙芝居まつりで紙芝居を
上演する阪本一房氏(1989年)



街頭紙芝居時代の阪本一房氏
(『紙芝居屋の日記: 大阪=昭和二十年代』より)

「紙芝居」といえば、戦後の時代、それも高度成長期以前、街なかでこどもたちを相手に、飴やお菓子を配って見物させる、いわゆる街頭紙芝居が想起されます。阪本^{かずふさ}一房氏(通称: いっぱうさん)もそのひとりでした。のちに彼は当市出口町に「出口座」を創設し、人形劇を上演するようになりました。しかし同時に、紙芝居の新しい展開にも取り組み、箕面紙芝居まつり・箕面手づくり紙芝居コンクールの立ち上げにも尽力しました。本展示は紙芝居の歴史をふまえて阪本一房氏の足跡をたどるものですが、あわせて現代における高齢者向けの紙芝居などもとりあげ、その発展に寄与しようとするものでもあります。

当館では出口座関連資料の寄贈を受け、令和4年(2022年)春季特別展で「出口座と阪本一房一現代人形劇の継承と発展」を開催しました。今回の展示はそれを引き継ぐとともに、紙芝居の歴史とその魅力をひろく一般に伝えようとするものでもあります。関連の講演会やイベントも数多く用意されています。どうぞご期待ください。

(当館特別館長 中牧弘允)

阪本一房氏と紙芝居の未来と

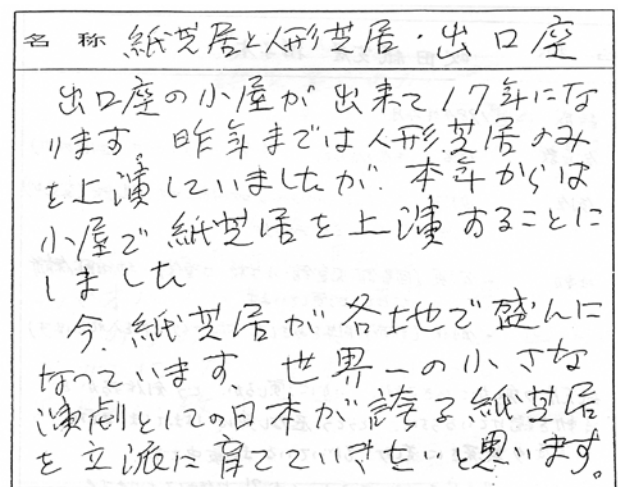
阪本一房氏…(いっぼうさんと呼ばせて下さい)
が演じる紙芝居を初めて見て、大きな衝撃を受けたのは今から40年前の1984年1月、吹田市中心公民館で紙芝居講座を受講した時のこと。学生サークルで人形劇や紙芝居を楽しんでやっていた経験があり、何気なく参加した私はびっくり仰天!!一房さんは裏書の文字を全く読まないし、絵にかいてある登場人物すべてがまるで生きているかのようにしゃべり、紙芝居のストーリーはぐいぐいと胸に迫るのだ。受講生たちにも、いきなり選べた紙芝居を「紙芝居の隣に立って、絵をみてやりなはれ」と容赦なかった。観客の前にたち、素の自分をさらすことに足が震えた。

一房さんが主宰していた出口座の機関誌『出口座』三期六号の「出口座日誌」を読み返すと、1984年2月1日(水)付にこう記されてあった。「中央公民館での紙芝居講座第二日目 日本の児童文化の中で 紙芝居のしめる位置は大きい でも 紙芝居も芝居であるという見解からはほど遠い上演が行われている 「絵ばなし」「読み聞かせ」というほどの上演方法でやられているのが現状で 紙芝居を芝居の一種と見なす上演方法を研究するグループを作りたいと思っている」

素人受講生に対して途方もない野望をいただき、紙芝居文化普及に^{ばくしん}邁進する第一歩を目指していたとは…そんな一房さんの^{しったげきれい}叱咤激励のもと、まもなく受講生により「吹田拍子木」というグループが立ち上げられ、吹田民話の紙芝居づくりや公演活

動もはじめられた。

この紙芝居講座の間に毎回、根田等(ねたひとし?)なる書き手の「紙芝居屋の日記」(のちに出版される)が配られたが、それが街頭紙芝居師たちのユーモア満載の実録で、根田とは一房さんのペンネームと知るや、もうすっかり一房紙芝居の虜になってしまった。



第4回箕面紙芝居まつりに向けた阪本一房氏直筆の出口座からのメッセージ(1992年)

私はその後、人形芝居出口座の座員になったが、座員として箕面紙芝居まつりに参加したり、一房さんが立ち上げに加わり審査員を務めていた箕面手づくり紙芝居コンクールへの応募を促されたりした。紙芝居の歴史も、文化としての意味も分からないまま、紙芝居への熱い思いをぶつけられるのはかなりの重圧だったが…一房さんの紙芝居を身近に数多く見ることはできたのは、今思えば幸せだったとおもう。

創作においても、実演においても、一房さんは徹底して絵にこだわり、紙芝居を「絵芝



箕面紙芝居コンクールの審査の様子(1995年)

居」と言いかえていた。あくまでも、絵に語らせる演技を芝居を追求した。

忘れられない実演の数々…「てんからおだんご」のおばあさんはわびさびのごときセリフ。「ニャーオン」の幼いねこと月との会話、ラストの余韻。「ひよちゃん」のめんどり母さんの話しぶりは母親そのもので。「プチトマト」では少年になりきり。「たすけて」はかるやかに飄々と命の重さを伝えて。「風」では実験的にすべての場面で一つの言葉を繰り返すだけ。実演のすごみは紙面では到底伝えられない。



「風」上演中

創作民話の原作者さねとうあきら氏の許可を得て、一房さんに脚色してもらった「かっぱのめだま」は、人形芝居のための台本を書いたのに「紙

芝居で伝えたがほうがええ」といわれ、何度も絵を描きかえた作品なので、とくに思い出深い。一枚の絵の可能性を最大限に追求して、人間にだまされていく河童の心情を伝えていくことを教えてもらった。葛藤がドラマを作ること、伝えたいことは欲張らないで絞り込むこと…一房さんのすごみのある芝居が忘れられない。

「紙芝居は、例えるなら歌手が5～6分間の歌で人を感動させるようなことを目指さんとあかんで。演者は俳優であり、演出家であり、劇場主でもある。」などと、一房さんは皆に熱く語っていた。当時から30年たっても、理解がおよばない言葉の数々を今なお、かみしめるばかりである。孤高の一房さんはさぞや歯がゆかっただろう。

一房さんは、亡くなるまでの十数年、体力的に人形劇はできなくなってしまった代わりに、関西のあちらこちらで紙芝居講座を行って紙芝居の魅力を伝え続け、切磋琢磨しあうサークルを各地に作っていった。そして箕面手づくり紙芝居コンクールで生まれる紙芝居に胸をときめかせ、紙芝居の芸術としての明るい未来を決してあきらめず、人生の最期を紙芝居に尽くした。

一房さんの強い意志から生まれた箕面紙芝居まつりは、今年7月、35回目を終えることができた。紙芝居という、人と人が集いあって楽しむあたたかな文化をこれからも多くの人たちと守り育てていこうとしているのだが、きっと「まだまだそんなことではあきまへんな」と、ぎろり、空のかなたからにらんでいるかもしれない。

(元出口座座員 柿本香苗)



令和6年7月3日、京都先端科学大学名誉教授の堀田穰さんに、阪本一房さんと紙芝居についてお話をおうかがいしました。



堀田 穰（ほった ゆたか）

京都先端科学大学名誉教授。月刊『子どもの文化』編集委員。月刊『絵芝居』編集長。第4回堀尾賞受賞（2021年）

中牧：2022年春の特別展「出口座と阪本一房」展では、人形劇を中心に展示を行い、結構好評でした。今回、その第二弾が秋から始まるので、イベントのような形で今日はお話をうかがいたいと思います。阪本一房さんは、お隣の箕面市まで出かけて行って、特に紙芝居に関する運動にも関わっておられますが、まずは一房さんとの出会いからお話を聞きたいです。

堀田：一房さんと出会ったのは、一房さんが人形劇から紙芝居に移って紙芝居に非常に力を入れ始めた1986年前後だったと思います。かなり脂が乗っていた時で、箕面で紙芝居のコンクールとかまつりを開催するので、いろいろ一緒にやったところから始まっています。1987年9月15日には梅花女子大学の上笙一郎さんが関西児童文化史研究会を立ち上げられ、私も加わりました。例会では口演童話家、児童文学者を呼んで話を聞くということがあり、そのおひとりに紙芝居づくりを熱心になさっていた阪本さんもおられたと思います。1988年になると、私も紙芝居についての関心が高まって、紙芝居まつりの話とか。紙芝居はこれからどうしたらいいのかとか、一房さんという話をしてたと思います。1988年の7月10日には一房さんと箕面の市民グループ、市職員の人たちと、紙芝居大会をやろうという話で関西紙芝居文化研究会を始めて、毎月合うようになりま

した。1989年5月の第一回箕面紙芝居まつりにつながっていくことになります。

中牧：そして、箕面での紙芝居まつりが全国的に広がっていくわけですね。

堀田：そういうことって同時多発的に起こるんですね。横浜では県立図書館で20回行われていた紙芝居コンクールが官の力では継続できなくなり、市民により新たに全国レベルの紙芝居のコンクールとして出直すわけなんです。箕面と横浜という東西で刺激があって全国レベルで始まったわけなんです。

中牧：大阪近郊と東京近郊と同じ感じですね。

堀田：そうなんですね。そういうところの住民たちの意識ってということだと思います。大都会の真ん中というより、むしろちょっと外れたベッドタウンっていうか。

中牧：面白いですね。

堀田：はい、面白いと思います。その辺のことは、2006年の『子ども白書』（草土文化）に「紙芝居の復権」という文章を書いています。街頭紙芝居は戦前からありましたが、ほとんど後継者がいなくなって廃れかけてる。教育紙芝居も戦争協力がありましたから児童文化としては無視されて、評価されず、衰退していたんです。そういう中で、一房さんが言い出したのは、これからは手づくりの紙芝居だということなんですね。一房さんは亡くなった後ですが、2006年ぐらいに高齢者向けの紙芝居を雲母書房が出版し始め、成功するんですね。手づくり紙芝居の画家や作家さんたちが、そのエネルギーで高齢者向け紙芝居を成功させるということになるんです。手づくり紙芝居運動がなければ、おそらく成り立たなかった。

既存の印刷紙芝居の画家や作家を使ってでは、成功しなかっただろうと思います。今の出版界で新しいジャンルを出そうというのは、大変なことだと思うんですけど、今振り返ってみますと一房さんが言っていたことは、予言が当たったという感じで、非常に先見の明があったなという気がしています。

中牧：先生はこの辺りから一房さんと一緒に青弓社から『紙芝居を作ろう！』という本を出されるわけですが、出版のきっかけってというのは？

堀田：一房さんの先輩の^{しょうだい}小代義雄さんの存在がすごく気になっていまして。本を書いた時点ではほとんどわかっていなかったんですが、演劇に衝撃をもたらした築地小劇場で新劇運動に力を与えたのが、人形劇の人形座でした。ところがそれを担った小代さんとか浅野孟府さんは東京で弾圧されるもんですから、関西に逃げてきちゃって、大阪人形座ができて、それでも戦争中は静かにしてたんですけど、戦後復権して、兵隊に行っていた一房さんも戻って大阪人形座に入るようになって、その辺の話は一房さんからいろんな時に聞かせてもらっていて、調べていくと、だんだん面白くなりまして。

で、紙芝居に関する最も古い文献である久能龍太郎っていう人が書いた『紙芝居の作り方』（春陽堂）っていう本は、人形劇みたいなことを紙芝居の舞台を作って、そこに紙の人形を入れて遊んだり、子供に直接遊ばせようといった内容の本で、後になります。久能龍太郎という人は人形座の^{せんた}千田是也とかと共通する意識で活動していたことが浮かび上がってきまして、慶應義塾で小山内薫の弟子でもあったんですね。ですからあの頃の新興芸術運動がやっぱり全体に大きく、大正の末期から昭和初期に若者にもものすごい影響を与えてたんだろうなあって。

中牧：かなり広い範囲ですよ。人形劇だけでなく、ジャンルを超えて、思想的にも。

堀田：文芸でもそうですよね。プロレタリア文学にすぐ飲み込まれちゃうんですけど、直前にはすごい前衛的な芸術っていうのがたくさん出てきて、その中の一人がどうも小代さんだったんです。一房さんは小代義雄さんの話だとか、千田是也がどうしたとか言って、いろんな話を喋ってくれましたが、小代さんや浅野さんをものすごいカッコいいと思われてみたいですね。ですから、一房さんも後で考えると前衛大好きなんです。

中牧：アヴァンギャルドですか。

堀田：どうもやってることが本当にアヴァンギャルドなんですよ。紙芝居でもそれができるという感じを掴んでたんですね。

中牧：なるほど。人形劇だけではなくて。

堀田：かつて小代さんが人形劇で新劇に影響を与えたように、紙芝居で劇に影響を与えられると確信を持ってみたい。思い返してみると、安部公房なんかの演劇理論なども結構取り入れたりして、そういう意味では尖った人で、面白い刺激的だったですね。それを何とか私ができる範囲でとらえようと思って作ったのがその本なんです。

中牧：なるほど。そうすると、だいたいこの本の文章のほうは、堀田先生が書かれて。部分的に一房さんが登場してくるのでしょうか。

堀田：そうですね。出口座の機関誌である『出口座』には、一房さんが書いた文章がかなりありましたから。それを編集してという形でした。だからこれ作って完成じゃなくて、私は一房さん亡くなってもずっと後まで引きずっていますね。

中牧：この青弓社ってのも、ちょっとアヴァンギャルドな出版社ですよ。そういうのを支えてくれる出版社でしたね。雲母書房は高齢者向け出版を支援してくれるスポンサーというかサポーターですね。

堀田：はい、そういうことです。北斎を支えた葛屋重三郎とかあんな感じですか？だからそういうところがあって出すことができた感じですね。アヴァンギャルドさっていうのは、私も若かったですし。そういう新しいことをやるっていう面白さですよ。

中牧：アヴァンギャルドっていうのは、その一方で、倒すべき敵がいなくなかなかアヴァンギャルドにはならないじゃないですか？

堀田：それはやっぱりそうです。それがおそらく教育紙芝居とか街頭紙芝居を考えてたと思います。一房さんの言い方だと街頭紙芝居は演劇でいったら歌舞伎みたいなもんやと、伝統芸やと。それに対して教育紙芝居っていうのは、新派劇やと。それを両方、アウフヘーベンするのが、手づくりなんだと。

中牧：手づくりの絵芝居だということですか。そういう思想的な背景があっても、その当時はあまりそれが理解されてなかったですね。

堀田：周りはほとんど理解してないと思います。一房先生は年取ってしんどくなったから、紙芝居を始めたようなことを言われていますから

ね。本当はそうじゃなくて。

中牧：思想的にやっぱりアヴァンギャルドのバックグラウンドがあった。

堀田：新しい事で、なんか衝撃を与えたいっていう。一房さんが最初に紙芝居作り始めたのは民話紙芝居ですね。民話からアヴァンギャルドはエライ離れてるんじゃないかと思われるかもしれませんが、実はあの頃、民話に対するっていうのは、マックス・リュートィの『昔話の本質と解釈』（福音館書店）だとか、いわゆる19世紀の小説なんかより、ずっと昔話の方がアヴァンギャルドであるっていうような論が出てたんですね。一房さんは知ってか知らずか分からないんですけども、割とそうだろうなと。その民話紙芝居からそういうアバンギャルドなところへ、ずっと行けたっていうのが、おそらく含世界性っていうんですかね。そういうことがやっぱり新しい。小説もフランスでヌーボー・ロマンだとかアンチロマンだとかが流行始めてた頃ですからね。だから、そういう流れを一房さんなりに掴んではったんだろうなと思います。

中牧：一房さんは吹田の民話をまとめていきますよね。紙芝居に行く前に民話の本をまず出版されて。

堀田：民話の本質ってのをわりとよくわかっていて、人形劇の脚本でも民話を使って新しいアヴァンギャルドのやり方っていうのを考えておられたんだと思います。実際に観客に演じる時に既成の教育紙芝居のやり方ではなく、紙芝居の裏の文字を全然読まずに自分の解釈で絵がこういつているからって、新しいやり方をして、それがウケたり、ウケなかったりと実験をしながら随分やっておられました。

中牧：民話を使ってカルタも作ってますね。吹田の民話カルタ。あれはどういうことなんですか？

堀田：あれも吹田の民話をやっぱりよく知ることですし、紙芝居とも共通するのは短い言葉。短い芸術。紙芝居を最も小さい演劇とかいう言うわけですけども、そういう短詩系で簡潔に、いろんな新しいことを表現することにこだわって行かれたんじゃないかなって気がしますね。だから紙芝居も大げさに人間がこう動くべきじゃなくて、ちっちゃな枠の中で絵を動かさないといけない。動かない絵を動かすという、そういう演劇が

今一番新しいと感じてやってられたんだと思います。

中牧：アウフヘーベンなんて懐かしい言葉が出てきましたけど。街頭紙芝居と教育紙芝居といわれる二つがお互いの敵にして対立してたところをアウフヘーベンしようとする、非常に面白い発想だと思います。先生の論文を読んでも中で櫻本富雄、今野敏彦著の『紙芝居と戦争―銃後の子どもたち―』（マルジュ社）っていう本を発見しました。実は今野敏彦先生を個人的に知ってるんですよ。学生時代にお会いしたことがあって。今野先生は、日本人移民の関係の調査をずっとされておられたんですが、紙芝居のことも書いておられるので、ちょっとびっくりしました。

堀田：その本で櫻本さん、今野さんが使ったコレクションは、今、神奈川大学の常民文化研究所に入ったんですよ。常民文化研究所の非文字資料研究センターが、目録を作ったり、共同研究したりしています。やっとな戦争協力紙芝居のちゃんとした目録が出来たんですよ。ですから、民俗学とか文化人類学は紙芝居とは相性が良いんだなと思って。

中牧：フォークロアのほうでも、今野先生が集められた貴重な資料を受け入れて共同研究も展開し、ちゃんと遺産相続されてるんですね。

堀田：そうですね。今までだとほとんど児童文化の分野ばかりだったんで、それだけではなくて文化人類学や民俗学の人たちが神奈川大学のおかげで関わってくれて。本当に良かったと思って、胸をなでおろしているところなんです。横浜ではコンクールの市民運動もありますし、横浜の博物館も紙芝居に取り組んでおられ、横浜は紙芝居のメッカになりつつあります。

中牧：その横浜なんですけど、私も関わってJICA横浜に海外移住資料館が2002年にできるんです。私は主に展示のほうを担当して、特に学校教育の中でどう展示を説明したらいいのかという相談を国際理解教育学会の先生たちをお願いをして、取り組んでもらったんです。で、学習の手引きを作ってもらったんです。その中で子供たちが来館し、グループ学習なんかをしたりする時に実は紙芝居とカルタを作ったんです。戦前の教育紙芝居とは違って、学校教育で博物館に出向いた時に、その受け皿として紙芝居を使っているのです。

堀田：ちょうど同じ頃っていうか、2000年越えると思うんですけども、カンボジア和平の時のNGO活動から紙芝居の海外展開が始まり、NGOなんか紙芝居使っています。絵本作家、紙芝居作家のやべみつのりさんなんか結構深く関わってて、私もやべさんに連れられてラオスに3年間通い詰めたことがあります。向こうにはNGOの現地事務所がありますから、そこで図書館開いてスタッフが子供達に紙芝居を読み聞かせる。子供たちが作って、演じる。コンクールまでやって、私審査員をやったことがあります。その頃から国際展開が始まってますよね。日本人って、ツイなんかそういう時に紙芝居を使っちゃうんですね。

中牧：理解するためのツールとしてはすごくいい。ひとりで学ぶというのでもなく、教師が教えるというのでもなく、JICAの海外資料館の場合も、ボランティアが紙芝居をやるんですよ。そのボランティアの多くはJICAの元職員。だから結構熱を込めてできるんです。展示場でも臨機応変にできるということで重宝させてもらっています。紙芝居やカルタはこういうところでも使われているんです。そんなふうな形で紙芝居を活用している博物館の例はほかにありますか。

堀田：私なんかは美術館はもっと美術教育で使えばいいと思います。

中牧：今回の展示でも、そういうところにちょっと刺激を与えられたらいいのではないかなとひそかに思ってますけど。

堀田：一房さんは、晩年に十年ぐらい、亡くなる直前まで京都教育大学で美術教育の集中講義を私と一緒に担当していたんですよ。学生たちにグループ作らせて人形を作らせて劇をやらせるんです。最初、一房さんの人形劇とか紙芝居を見てもらって。それで学生たちがやる。

中牧：ちゃんとイメージは最初にできてるわけですね。

堀田：新しい文化を開くっていうのは一房さんも全部は亡くなったので見られてないですけども、かなりの部分、開けるんだっていうことを感じておられたと思いますね。

中牧：一房さんが亡くなって。人形劇の関連資料は当館のほうにだいたい納められて、今回2回目

の展示になるわけですが、先生が期待されること、特に強調しておきたいこととかありましたら、ぜひ紙面でもPRさせていただきたいと思います。

堀田：ほんと新しい局面を開こうとしたし、いくつか生前には実験もされてましたし、そういうエネルギーを亡くなる最後まで絶やさなかった人だなあって思います。そういうことを知っていただきたいし、小代義雄さんについては、吹田で亡くなられたわけで、左翼弾圧で追われてきたということもありまして、分かんないこともまだ多くて、吹田の博物館では小代さんのことも探っていただきたいなあってというのが私の希望ですね。

そして、新興芸術運動からプロレタリア芸術運動って、新興が戦争でダメになったからプロレタリアへ変わったみたいな論調が結構ありますけど、小代さんのような人たちって、割とドイツやアメリカと行き来したり、国際人がすごく多かったですよ。そういう情報を持ってる人がやっぱりかっこよかったんですよ。それがあのプロレタリアのあんまり面白くない芸術に取って代わられたってのはどう考えても疑問で、見てるとそうでもなかったなと思いますね。

中牧：だからそういう受け皿が民話であるとか、フォークロアであるとか、そういう観点から、もう一回見直すと、新しい側面っていうのは出てくるのであって、決してプロレタリアとか前衛だけを標榜した芸術文化運動でもなく、もっと地に根ざしたというか、伝統に基づいたところの掘り起こしっていうのも結構やっていますね。一見矛盾するようではあるけど。

堀田：戦後の民話運動もやっぱりモダニズム的なところがありますよね。民話からまた新しい何かを得て、それがアヴァンギャルドに変わって移っていくっていう。そこらへんの過程を本当は見極めたいなと思っています。

中牧：ぜひ今度の展示でもその一端を示せればと思っています。ご講演もお願いしておりますけれども、よろしくお願い致します。まずは『博物館だより』を皆さんにお届けしてまいります。本日はありがとうございました。

令和6年度(2024年度) 秋季特別展「紙芝居の歴史と阪本一房」 関連イベント

オープニングイベント(開会式&展示解説)

会場：2階講座室(申込不要)
10月12日(土) 午後1時～2時 (無料観覧日)

講演会 定員120名 申込不要 会場：2階講座室

- ①10月12日(土) 午後2時30分～4時
「なぜ高齢者向け紙芝居は生まれたのか
ー介護現場と手づくり紙芝居の出会いー」
[講師] 松村康貴氏(くるんば代表)
- ②11月3日(日・祝) 午後2時～3時30分
「出口座から新しい芸術としての紙芝居まで」
[講師] 堀田穰氏(京都先端科学大学名誉教授)
- ③11月24日(日) 午後2時～3時30分
「隠された子どもの空想力を刺激する阪本一房さん
の紙芝居の魅力
ーキッチンカーのようにどこへでも届けられる
出張演劇ー」
[講師] 村田利裕氏(京都教育大学名誉教授・京
町家まち美術館館長)
- ④10月20日(日) 午後2時～3時30分
歴史講座「紙芝居の歴史」
[講師] 藤井裕之(当館学芸員)

人形劇の実演と講演 定員120名 申込不要

会場：2階講座室
10月14日(月・祝) 午後2時～3時30分
「実演と阪本一房さんの思い出
ー脚本のつくり方・人形つくり・演出ー」
[講師] 渡邊千芳氏(人形劇団せっぽく座)

のぞきからくり上演 各回10組 要申込(多数抽選)

会場：3階特別展示室
11月10日(日) てづくり紙芝居館
大人向き「地獄極楽」
①午前11時～11時15分
②午前11時30分～11時45分
子ども向き「へっぽこ忍者危機一髪！」
③午後2時～2時15分
④午後2時30分～2時45分
●申込メ切 10月29日(火) 必着
*観覧料が必要

錦影繪上演 定員80名 申込不要

11月17日(日) 午後1時30分～2時30分
「桜白波憑依豆袋」ほか(錦影繪池田組・植田家錦
影繪プロジェクト)

紙芝居上演 定員100名 申込不要 会場：2階講座室

- ①10月19日(土) 午後1時30分～2時30分
ピーマンみもと氏・杉山尚輝氏
「午前1時の集会」「みいちゃんのさんぽみち」「黄
金バット」「ひよこちゃん」ほか
- ②11月2日(土) 午後1時30分～3時
柿本香苗氏・高鳥公子氏(元出口座)
「月の光でさらさっしゃい」「かっぱのめだま」ほ
か「阪本一房と紙芝居の思い出ばなし」
- ③11月9日(土) 午後1時30分～2時30分
紙芝居サークルちょうちょ
「まちがいさがし」「ポンポコ歌劇団」ほか

紙芝居ワークショップ 会場：2階講座室

11月9日(土) 午前10時30分～12時
「紙芝居をつくってみよう」紙芝居サークルち
ょうちょ *4コマ・穴あき紙芝居をつくります
●定員15名・要申込(多数抽選)
●申込メ切 10月29日(火) 必着

特別館長ギャラリートーク 申込不要 会場：特別展示室

11月4日(月・休) 午後2時～3時
中牧弘允(当館特別館長)
*観覧料が必要

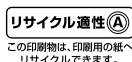
クイズラリー 申込不要 会場：特別展示室

10月13日(日)・19日(土)・26日(土)・27日
(日)・11月2日(土)・16日(土) 午後1時30分～
3時 吹博の会
*観覧料が必要

イベント申込方法

吹田市役所ホームページの電子申込システム(9月
20日より受付)か、はがき、FAXにイベント名、
時間、参加者全員の氏名、郵便番号、住所、電話番
号を記入のうえ締切日までに博物館へ

吹田市立博物館だより 第99号 令和6年(2024年)9月13日発行
編集・発行：吹田市立博物館 〒564-0001 吹田市岸部北4丁目10番1号 TEL 06(6338)5500 FAX 06(6338)9886
ホームページ <https://www.city.suita.osaka.jp/museum/>



この冊子は1,700部作成し、1部あたりの単価は53円です。
森林認証紙と植物油インキを使用しています。